

池田澄子さんからの手紙



俳句を書くとき、私はただ只管、一句と向き合っているだけで、その後のことは考えていないのです。私の言葉は、人の心に届くように書いているだろうか、と考えるだけです。

蝶よ川の向こうの蝶は邪魔ですか

句集

月と書く

池田澄子

sumiko ikeda
tsuki to kaku

朝出版

兎も角、身に余る有難いことと、はらはらしながら感謝しております。

「蝶」の句は、拙著『月と書く』を纏めることで、平常心に戻りたかった、その戦争をする人間という生き物への思い、人間としての情けなさから解放されたくて書いた句ですが、その思いを共有していただけたことがとても嬉しいです。

生意気な物言いに聞こえたらお許しください。

私は「口語俳句」を書いているつもりはありません。

「普通の言葉」で書いているだけです。

会話の中でも、ちょっと古風な言い回しをしたりしますから、
そういう書き方もします。

なので、いわゆる新仮名遣い、普通に使っている書き方です。

偶に「てふてふ」なんて書いてみたくなることもありますけど、、仕方なく。



兜太先生の御作、

人体冷えて東北白い花盛り

は凄い句ですね。私は一押し。

ムツオ先生の御作、

泥かぶるたびに角組み光る蘆

が私も一押しなので、嬉しいです。

敏雄先生の

あやまちはくりかへします秋の暮

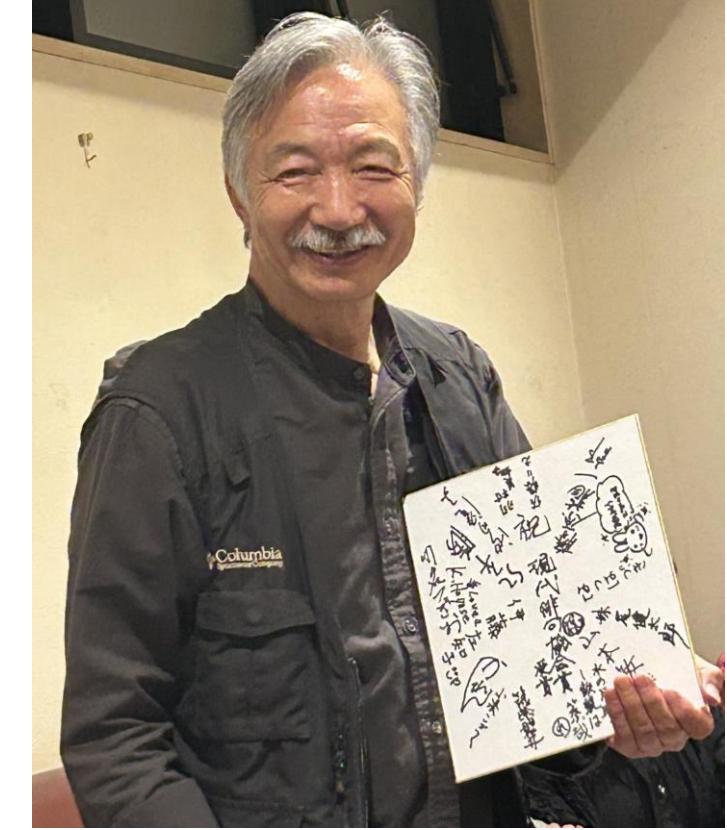
すごい句だと思っています。



大井恒行さんからの手紙

第50回現代俳句講座

「昭和百年 俳句はどこへ向かうのか」に参加された皆さん！ ボクも、神野紗希、筑紫磐井、柳生正名各氏による討議に、是非、駆けつけて、その一端にでも触れるべきところ、あいにく、先約があり、残念ながら参加が叶いません。



「現代俳句3人3句選アンケート」の集計結果を見ますと、ダントツのトップに、金子兜太の句が入り、

池田澄子、渡邊白泉、富澤赤黄男、鈴木六林男、高野ムツオと続いたことをみても、いかにも現代俳句協会らしい作家別ランキングになっていると思います。

(いわゆる俳壇的ではないと思いますが)

「豈」の冥界同人の攝津幸彦が上位にいるのも嬉しいことです。

現在、いわゆる俳壇の若手からは絶大な人気がある田中裕明が2句に止まっているのも、それらしい一事だと思われます。

そうした中で、たまたまのタイミングだと思いますが、柳生氏のご指摘によると、ボクの句を4句を選んでいただき、現役世代のランキングでは、第5位らしく、身に余る光栄というのは、こういうことを言うのでしょうか。その4句は、

針は今夜かがやくことがあるだろうか
林檎の花散るは都の外ならん
除染また移染にしかず冬の旅
戦争に注意 白線の内側へ



です。もちろん、ボク自身としては好きな句が他にもありますが、こうして句を選んでいただき、読んでいただける機会が増えることで、作品が残ることが短詩型の無名性に近く、良いところでしょう。

ボク自身、さらなる作品の飛躍を期したいところですが、果たしてどうなることやら、じつは皆目見当がつきません。せめて、俳句の神に見離されないようにしがみついていきたいと思っています。

皆様とともに、俳句の未来に連なりたいと思います。今後とも、叱咤をお願いいたします。そして、皆さんのご健吟を祈ります。



高野ムツオ会長からの手紙



生きていれば381歳の芭蕉から19歳の知念ひなたまで
多彩なラインナップとなった。
顔ぶれとその作品を眺めながら、まずは現代俳句の現
代とは何かについて考えさせられた。

伝統俳句が俳句に培われた伝統を重視し、現代俳句が現代という時代性を重視する俳句とすれば、芭蕉の俳句は芭蕉の生きた時代において、まさに現代俳句であった。

だが、現代という時代性や社会性を作品自体に反映した俳句を現代俳句と呼ぶなら、対象範囲はもっと狭まる。

とりあえずは、この昭和百年の間の俳句の豊潤を味わいながら、これからのはじめの俳句を考えたい。その話題を提供してくれる興味深く、貴重なアンケートであった。





現代俳句全国大会の講演から

今度、講演しなければいけないということで、自分が一番どんな俳句が魅力的だったか問われる可能性があるから、いくつか挙げようと思ってきたんですね。いろいろ選んだんですよ、悩みながら。



最後に選んだ句の一つは

「戦争が廊下の奥に立つてゐた」

渡邊白泉。(中略)

佐藤鬼房も言つてました。これまでの俳句のなかで一番新しい俳句はだれか。渡邊白泉なんですね。私もそう思う。(中略)

あと、金子兜太

「彎曲し火傷し爆心地のマラソン」

最後まで私が残したいのは富沢赤黄男

「切り株はじいんじいんとひびくなり」

同じく切り株の句

「切り株があり愚直の斧があり」佐藤鬼房。

切り株っていうのは、人間が切らなければ生じないんですよ。人間によって切り倒された木、その木がいつまでもじいんじいんと響いている。切り株が切り倒したのが斧だ。

斧と切り株。人間と自然。そして切り倒さなければいけなかつたのが愚直な斧なんだという、この自虐に満ちた発想。どちらも戦後すぐの俳句です。たぶん戦争を背景にしなければこの俳句は出てこない。

